

2 日目 (11 月 26 日) スーさんのレクチャーノート

スーのアフリカ話

<キーワード>

アフリカのイメージ

いろいろなアフリカ

セネガルでの体験

京都の「アフリカマンガ展」:会場づくり、フランス語圏アフリカ、出品されたマンガとアフリカの作家たち

<レクチャーで話されたこと>

これからアフリカのマンガの話をする。

スライド1 質問する:アフリカのイメージはどんなもの?

たかさん 土地が広い。交通網(こうつうもう)が整備されておらず、水や食料の配給(はいきゅう)がむずしいと聞いた。

ケンケンさん 水が少ない。ほとんどの地域で水が不足している。

にんさん 野生動物が多い。

はやしさん 貧しいと思う。水が少ない。

(スーさんは)まえはアフリカについてなんのイメージも持っていなかった。アフリカとのはじめての出会いには 10 年くらい前に北アフリカのモロッコへ行った。それまでモロッコについてなにも知らなかった。わたしがヨーロッパにいたところで、ヨーロッパから近いモロッコへ行った。

モロッコの空港の近くではじめて見た風景に「すごくうれしい」と感じた。

なぜなら、日本など、ほかの国に行ったことはあったが、それまでの風景とモロッコの風景はまったく違うものだったから。

自分が知っていた世界がすべて壊されるような経験だったので、うれしかった。

それからアフリカに興味を持つようになった。

スライド P2 わたしが勤める京都精華大学(きょうとせいかだいがく)の前学長がアフリカのマリ出身であり、アフリカ研究センターがあるため、「マンガとアフリカをつなげた研究」を頼まれた。

アフリカに行って、もっと知りたいと思い、研究をはじめた。

3 年前からアフリカへは 6 回くらい行ってマンガを調査している。

現地でマンガを教えるワークショップもおこなった。

このようにしてアフリカとコネクション(関係)ができた。

参考) 京都精華大学 アジア・アフリカ研究センター アフリカマンガ研究プロジェクト>>



スライド P3 わたしはフランス語が話せるため、フランス語圏のセネガルへ京都精華大学の学生が研修に行くプログラムを担当している。

スライド P4 じっさいにアフリカへ行って気づいたことは、アフリカといっても、とても違うところがある。

みんながアフリカのイメージで言ってくれたことはすべて正解と思う。

しかし、それでアフリカが表現や説明できるわけではない。

右上の写真 セネガルの北西部にある都市、サン＝ルイ(Saint-Louis)。ヨーロッパ風の建物がたくさんあり、きれいな街。

左上の写真 コートジボワールの最大都市、アビジャン(Abidjan)。高い建物がずらっと並んでいる。

左下の写真 モロッコ。北アフリカのモロッコはアラブ圏で、いわゆる黒人(黒色人種のひと)は多くなく、風景も西アフリカや中央アフリカとはちがう。

右下の写真 セネガルの首都ダカール(Dakar)の中央駅。2022 年(21 年末)に近代的な通勤鉄道が開通した。

アフリカにはいろいろな面があることを知ってほしい。

スライド P5 アフリカの水事情(スーさんの体験より)。

セネガルの首都ダカールでは日本や中国の都市と変わらない生活ができる。

地方では、日本や中国では見ない形の建物がある。

下・真ん中の写真 地方の家のシャワー。シャワーはあるが、水が出ない。大きなバケツに汲んである水でからだを洗う。最初はとまどったが、セネガルのひとにできることは、わたしにもできると思い、バケツの水をシャワーがわりにしたら、楽しかった。

スライド P6 アフリカのマンガの話。

これまでの3年間の調査研究の成果として、京都国際マンガミュージアムで「アフリカマンガ展」を10月～24年2月中旬まで開催している。

アフリカマンガ展 >> <https://kyotomm.jp/ee/africamanga/>

NHK 関西 NEWS WEB「アフリカの作家が描いた漫画 京都で企画展」>>

<https://www3.nhk.or.jp/kansai-news/20231205/2000080180.html>

アフリカマンガ展 主な出品作品(ことしるべ) >> <http://event.kyoto-np.co.jp/event/africamanga.html>

企画展「アフリカマンガ展」京都国際マンガミュージアムで、仏語圏アフリカ諸国を中心に複製原画などを紹介 (FASHION PRESS) >> <https://www.fashion-press.net/news/103695>

スライド P7 アフリカマンガ展の会場。

会場の入口はこんな感じで、ほかの展覧会とは違って見えるだろう。違うように見えるように計画したから。

土壁(つちのかべ)は、わたしたちが土をこねてつくった。

廃材(はいざい)で会場をつくった。廃材とは、ほかのひとが使って捨ててしまった素材(そざい、材料)。

展覧会の会場は、捨てられた素材を使ってつくった。

その理由の一つは、日本のような先進国が、これから発展する国、いま発展している国のためにできることを考え、新しいものを使わないようにした。

先進国は新しいものをつくり、どんどん使っているが、そのようなことをしたくなかった。

スライド P8 フランス語圏アフリカのマンガ。

展覧会は主に「フランス語圏アフリカ」のマンガを紹介。

アフリカにある54か国のうち22か国がフランス語圏(フランス語が話されている地域)になる。

質問:フランス語を使うアフリカの国を知っているか?

ひとさん アルジェリア、マリ

えりさん 西アフリカのベナン

ほかには、モロッコ、モーリタニア、チャド、ニジェール、コンゴ民主共和国、などもフランス語圏。

複数言語が公用語の国もある。カメルーンはフランス語と英語両方を使う。



マンガの前からあった「視覚文化」、技術やストリートアートの文化、またアフリカのマンガの歴史も紹介している。

スライド P9 最近のマンガ作品を展示。

スライド P10 マンガはフランス語や英語で書かれており、日本語の訳文をつけたフィルムをかぶせて展示している。フィルムをめくると、オリジナルのテキストが見られる。

スライド P11、P12 グリット・アブエのマンガ『恋するヨブゴンガール』。

コートジボワール、アビジャン出身のストーリーマンガ作家、グリット・アブエ (Marguerite Abouet) がストーリーをつくり、フランスのレマン・ウブレルリ (Clement Oubrerie) が作画したマンガのシリーズ。

1970年代のアビジャンが舞台。

コートジボワールは2000年代の一時期、内線(国内の戦争)になり、たいへんな状況に陥った。

それ以前は「アフリカのパリ」と呼ばれるほど豊かな地域だった。

1970年代、いろいろなひとたちが人生を楽しむ街アビジャンに暮らす女の子たちの恋や人生をえがいたマンガ。

絵の感じからも楽しいようすが伝わると思う。

スライド P13、P14 ルーキアタ・ウエドラオゴのマンガ『ワガドゥグー・プレッセ』。

ルーキアタ・ウエドラオゴはブルキナファソ出身の女優、脚本家でマンガの原作もつくる。作画はフランスのオド・マツ。

主人公はブルキナファソ出身の女性で、パリに住む彼女の日常をえがいている。

スライド P14 主人公が努めるデパートに来た女性客の顔にシミ(肌の色のむら)ができています。

アフリカの一部では女性が肌を白くするために漂白クリーム(ひょうはくくりーむ)をぬっている。国によっては女性の4割が漂白クリームを使っている。

からだにととても悪い成分が入っている。顔に色むらが出てしまう。

女性客が「白い肌がいい」と言うと、主人公が客をたしなめる(そんなことをしてはいけないと助言する)。

このようにマンガから、アフリカのひとたちの日常をのぞくこともできる。

スライド P15、P16 日本のマンガスタイルのマンガ『革命』。

展覧会では、フランスやベルギーのコミックス(バンド・デシネ)の影響を受けたマンガと日本マンガの影響を受けたマンガを紹介している。

アルジェリアのフェラ・マトウギのマンガは読む方向も日本マンガと同じで、右から左へページをめくる。

『革命』は、1830年～1962年の132年間フランスの植民地であったアルジェリアが独立運動をおこしてフランスから独立を勝ち取ったことをアルジェリアのマンガ家がえがいた。

いろいろな視点のマンガがえがかれている。

スライド P17 出版されているアフリカのマンガも展示している。

アフリカに対するイメージがより具体的に、いろいろなレイヤー(層)があって、いい意味で複雑(ふくざつ)になればよいと思っている。

こまった時、こんなことやってみたい！と考えた時は、グループのメンバーと話してみよう！

講師やグループリーダーにも聞いてみよう！

のんきさん・・・アニメの制作

スーさん・・・マンガ的な表現

さとーさん・・・映像(ライブアクションなど)の制作

senyaさん、ニンさん、たかさん、メイさん、シトウさん・・・グループの話し合いに入って、みんなを助けてくれます

スー(ユースギョン)